

## 北米4大学 図書館ならびにラーニングコモンズ(共用自習施設)視察報告

関西大学第一中学校 教諭 的場 千晃

はじめに

今年で創立 105 周年を迎える関大一中・一高には1950年代に建てられた校舎もあり、建て替えの機運が高まっている。そんな中、昨年度、図書情報部員として秋田県にある国際教養大学の視察の機会に恵まれ、大きなショックを受けた。施設が素晴らしいだけでなく、その運用が非常によく考えられたものであったからである。詳細については昨年度の「研修」掲載の報告を参照されたい。図書館と授業、キャンパスでの寮生活と留学生活が相互補完的に機能しており、その間で学生は自分の目標にアプローチしていくという学びのシステムが見事に構築されていた。海外の大学での「当たり前」が、うまく日本式に落とし込まれているように感じた。

それでは現在の海外の大学の「当たり前」はどうなっているのか。今回の在外研修のスタートはこれである。学校教育の根幹的役割を果たす図書館やラーニングコモンズを視察すれば、その学校が今目指している教育の一端に触れることができるはずだという考えに至った。

日本では2020年度の新学習指導要領で謳われている「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)」に向けての準備が急がれている。これまでの教育システムそのものを見直す時期であるともいえる。大学と中学・高校という違いはあるが、近い将来の一中・一高というシステムの大幅なアップデートの一助となることを願い、ここに報告させていただきます。

スタンフォード大学(Stanford University)

創立:1891年

学生数:約16000名

## 1 キャンパス

最初の視察はスタンフォード大学からスタートした。何のコネもないまま全くの飛び込み。かろうじて公式HPからキャンパスツアーに申し込んでおき、カリフォルニア州はパロアルトにあるキャンパスを目指した。世界のIT革命の震源地、シリコンバレーにほど近い立地の広大なキャンパスは、夏休み期間にもかかわらず大勢の人で賑わっていた。「スタンフォード式云々」の出版物で日本でも話題に上がることの多いこの大学で感じたことは、伝統や格式といったものでなく、明日の世界を変えるアイデアにこそ価値があるという気風であった。まさに校訓どおり「自由の風が吹く」キャンパスである。



キャンパスツアーは全て現役のスタンフォード学生が案内してくれる。事務職員・教職員の出番は一切ない。入学希望者向けの内容なので、まずは「スタンフォードに入学するために」といった内容のレクチャーから始まった。要求される学力については皆さんよくご存知の通り(もっとも高いレベルが必要)ということで詳しい説明は省かれ、それよりも大学が求める学生像についての話に多くの時間が費やされた。推薦書の内容がいかに重要か、課外ではどれぐらいの時間何をして過ごしたのか。何より重要なことは志願者がその活動を通じて何を学び、いかに成長できたのかということを伝えられるかどうかであるとのこと。活動組織のトップである必要はなく、有名で大きな組織に所属している必要もない。志願者自身がいかにその組織に貢献したかが重要だと強調されていた。



さらに入学者選抜では専攻別に定員が振り分けられていない。入学者は自分の興味関心に応じてあらゆる講義を履修することができ、3回生になるタイミングで専攻を決定する。また学期区切りは2期制ではなく4期制が採用されており、3か月きざみで次々と講座が展開されていくため非常にスピードが要求されるようである。24時間利用可能な図書館等のラーニングコモンズ、そして高い能力と動機付けを持つ学生とが絶妙にバランスしていることが想像される。出席者はほぼ全員保護者同伴で、ヨーロッパ、アジアからの参加者も散見された。積極的に質問するのは志願者当人ではなく保護者であるというところは日本と同様であった。授業料についても、多くの学生(67%)が大学の援助を受けながら在籍しているとのこと。年間約4万ドルという学費ながら、優秀な学生にチャンスを与えるための学費援助制度を充実させている。卒業時に借金なしの学生の割合が79%であるという点もパンフレットでは強調されていた。



ここまでの説明をしてくれた学生はアリゾナ出身の男子学生で、アフロヘアの一部を金髪に染めたいまどきの、良い意味で普通のアメリカの若者であった。ペットボトルの水を片手にリラックスした雰囲気ながらもポイントを押さえたうまい説明を展開してくれた。保護者を含む大勢の出席者を前にして、まだ20歳にも満たない若者がこのような雰囲気での説明を行えるということに感心した。決して軽薄・軽率な印象を与えないとても好感の持てる説明ぶり、彼の能力の高さがうかがい知れた。彼の言葉のなかには次のような内容も含まれていた。「スタンフォードでは自分の興味関心のままにどんな単位も履修することができますが、途中放棄の授業が多いと将来のキャリア選択の場面でやはりそういう人間であると判断される。在籍時の記録は自分という人間について多くのことを物語るということに気をつけてください。」学校の華やかさを強調するセールスポイントのなかにこのような言葉もはさむことができる彼の人間性が、入学者選抜で評価されて彼がこの学生になったとすれば、この大学の選抜方法は素晴らしいというしかない。

実際のキャンパスツアーでは20~30人の小グループに分けられ各グループに1人の学生ガイドがつく。先ほどのレクチャーの学生とは異なる女子学生であるが、やはり彼女もよく喋る。ものすごい語彙量でキャンパス要所の案内が展開されていく。建物についての説明や自分がどのように利用しているか、自分の専攻などを交えながら時間通りサクサクと進めてくれる。若者言葉やスタンフォード生独特の施設の呼び名などの補足解説にも抜かりがなく、保護者への配慮も感じられる。

キャンパスのシンボルフーバータワーに始まり、ヒューレット・パッカードの名を冠した学舎を経由して教会へ。それぞれの建物にまつわる云われを交えながらツアーは進む。どの建物も非常に手入れが行き届いており、伝統的な重厚感漂う外観でありながら、現役の学舎として完全に活用されている雰囲気漂っていた。以下、こちらのガイド学生の話すエピソードで印象に残ったものを紹介させていただく。

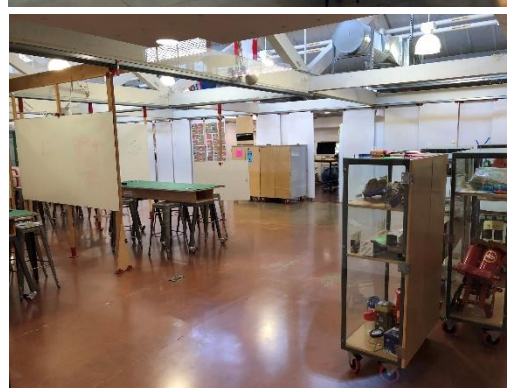
私は生来数字に強く、それだけを根拠にやや漠然と進路を決定してきた。大学に入学してからも理工系の単位を中心に履修してきた。しかし恩師からの「君の人間というものへの興味・関心は無駄にするのはもったいないね」との言葉がいつも引っかかっていた。ある時、インターンシップで犯罪統計学というものに触れる機会に恵まれた。私はそこでついに自分の能力と興味関心の全てを生かして社会貢献できる道を見つけたと感じるに至った。今私はそこに向けて迷うことなく前進している。



## 2 図書館およびラーニングコモンズ

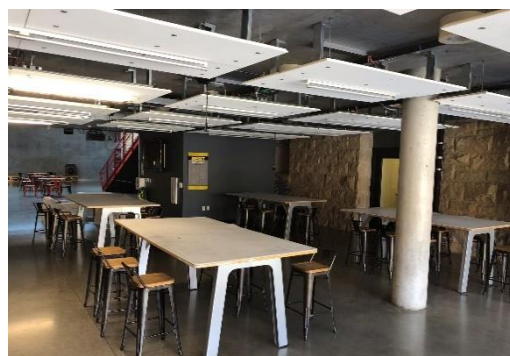
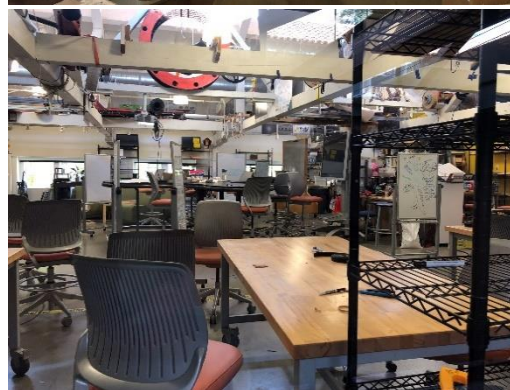
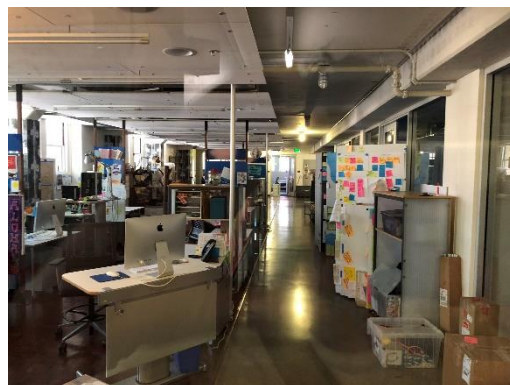
「そもそも間違いなんてない。勝利や失敗もない。ただ創造があるのみ。」

ここで見学した施設は Thomas F. Peterson Engineering Laboratory という名のラーニングコモンズ。スタンフォードには通称 d-school (Institute of Design at Stanford) と呼ばれている、専攻や院生・学部生関係なく有志の学生が登録できるゼミがあり、学生たちはそこで課題解決のための様々な試みを実行する。異なる専攻の学生が交わることで既存の枠組みにとられないユニークなアイデアが生まれる場として、世界中の各分野から高い関心が向けられているゼミが行われているのがこの施設なのである。ここには多くの法人や行政が実際に直面している課題が相談として持ち込まれ、学生たちはその解決に取り組むなかで design-thinking と呼ばれる手法を身に付けていく。さほど大きな建物ではなく、外観は特に目立った特徴はない。内部に足を踏み入ると学習空間というよりはアトリエ、スタジオ、あるいはガレージといった雰囲気。1階の玄関ホール部分には履修登録学生の顔写真が壁一面に張り付けられている。クラシックなアメ車がディスプレイされておりわくわくする。奥に進むと大きな吹き抜け空間にラウンジ式のラーニングコモンズが設置されており、学生たちが自由にディスカッションできる空間となっている。講師を招いてのイベントや様々なプレゼンをやる際にもこの空間が使用されるようになっている。筆者の見学時にはなかったが、吹き抜け上部の鉄骨の梁には冒頭の言葉が書かれたバナーが吊り下げられている。2階部分の部屋の内部は小道具の差はあるものの、基本的にはホワイトボードとポストイット、そして腰高のスツ



ルとテーブルがレイアウトされている部屋がいくつもある。そしてユニークな点は壁に様々な工作用の工具がかけられている点である。アイデアを固めていく工程において一度実際にモノにしてみる事が必須項目になっているためである。1階部分はまさにコモンズスペースになっており、Zラックと呼ばれるキャスター付きホワイトボードとスツール、テーブルがいくつも置かれている。全ての家具は学生たちが自分たちの都合に合わせて自由に移動させることを前提に選ばれており、壁には原状回復のためのレイアウトと注意事項が小さく掲示されている。研究室や教室というより、子どものおもちゃ部屋のような空気に満ち満ちた空間で、そこではあらゆる考えや取り組みが自由に行われており、「とにかくやってみよう」という場であることが即座に感じ取れた。

ここで行われているのはイノベーションを実現する方法についての研究と取り組みで、それは design-thinking と呼ばれている。最大の特徴は「問題に関わる人への共感」から全てを始めるという点である。理論・仮説から始めて検証へとつなぐのではない。まず「共感」、そしてその後に「問題定義」があり、「創造」→「プロトタイプ」→「テスト」の順で課題解決を進めていく。この考え方、思想が建物の隅々にまで横溢しており、そこにいるだけで自分の創造力が活性化されるような感覚を覚えるそんな空間であった。



カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校(UCLA)

創立:1919年

学生数:約45000名

## 1 キャンパス

訪問2校目として選んだのはカリフォルニア州立大学ロサンゼルス校、通称UCLAであった。詳細はともかくTシャツなどのロゴプリントで目にすることも多く、日本人にとっては最も知名度の高いアメリカの大学の一つである。場所はロサンゼルスダウンタウンから西に25キロほど離れたところで、ウエストウッドという名のかなりあか抜けた雰囲気のある地区である。やはりキャンパスのいたるところで工

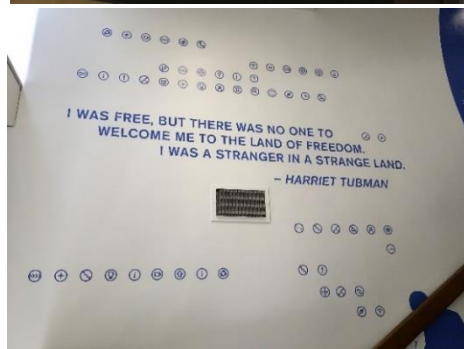


事が行われており、夏休みの雰囲気が漂っていた。ほぼすべての施設は出入りが自由で、許可証の事前申請等は不要であった。広大な敷地には美しい芝生と植栽が施されており、時々リスが姿を見せてくれる。淡い色に焼かれたレンガの学舎があちらこちらにドーンと鎮座しており、見上げるとスクールカラーである「UCLA ブルー」のカリフォルニアの空がどこまでも広がっている。

こちらの大学で感じたことは「開放感」であった。物理的な広さもあるが、先述のとおり誰でも施設への出入りが可能であることや、コネなし・アポなし見学者である私に対しても、短い時間ではあったものの図書館施設の責任者の立場にある方が対応してくださったことからそれは感じ取れた。最初に見学した図書館のカウンター業務をしていた学生と思しき人物は、私が訪問の目的を伝えると対応可能な責任者の名前と居場所をメモして私に渡してくれた。その紙切れを頼りに記された場所へ行き、その旨を申し出ると本当に奥の部屋から担当の方が姿を現した。「この後アポがあるので・・・」と言いながらも時間の許す限りの対応をしていただけた。大きな組織ではなかなかあり得ないことであり大いに感謝すべきことであった。もう一つ別の図書館でも同じような流れで責任者の紹介をいただけたが、残念ながらこちらはお会いすることはできなかったが。しかしいずれにしても、私にとっては大きな驚きであった。

## 2 図書館およびラーニングコモンズ

まず見学した施設は Charles E. Young Research Library という名の図書館であった。1960年代から70年代に建てられた近代的な外観を持つこの図書館は2010年前後に地下1階と1階部分が改装されている。需要の高い時期には24時間使用可能である。地下1階では希少な図書のコレクションに加え、学生の研究や論文作成のアドバイスを受けることができる。地上1階の大部分がいわゆるラーニングコモンズスペースとなっている。モニターを中心に6〜7名が座れるソファが半円状に置かれ、その背もたれがパーテーションボードになっているユニットが10程あり、そこで学生はグループワークも個別の学習も可能で、疲れたら横になって休むこともできる。「グループが話し、話し、作業し、探求し、創造できる場所であり、ここでは大スクリーンとノート PC、そして Wi-Fi が利用できる」と説明書きがされていた。奥のスペースにはグループ学習専用のブースもいくつかあり、また広くとられた廊下部分にもカウンターとツールがおかれている。例にもれずカフェも同じフロアに併設されている。そして紙書籍の書架と閲覧スペースが仕切られた空間の中に設けられていた。2〜5階はいわゆる伝統的な図書館空間になっており、開架式の棚に分類された紙図書が並んでいて、窓際など所々に閲覧用のイスと机が置かれている。上下階をつなぐ階段の踊り場には女性活動家の言葉や先住民の歌の歌詞などが大きくプリントされていた。ここは単に学歴を手に入れるための場所ではなく、人生の指針としての知を獲得するための場所であるというメッセージを強く感じた。

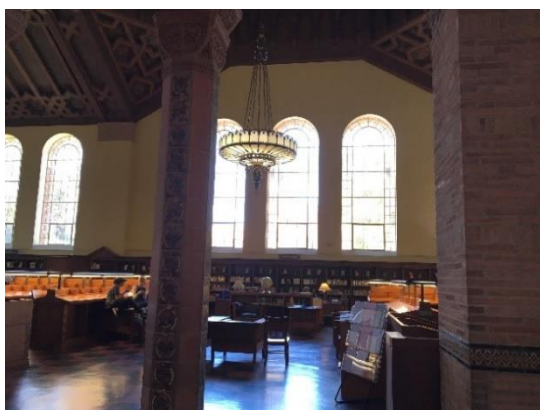




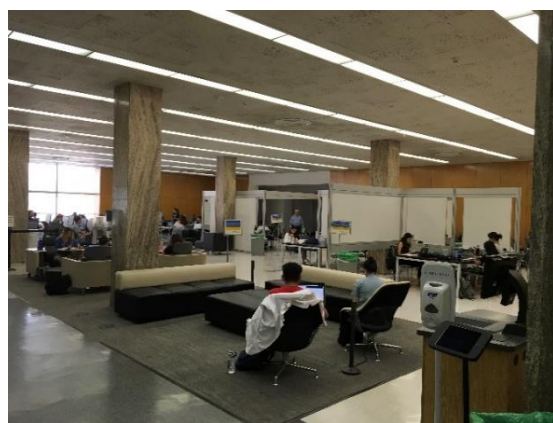
次に訪れた施設は Powell Library. 約90年前に建てられた淡い色のレンガの素晴らしい建物であった。教会のような作りの建物の中はやや薄暗く、高い天井からは手の込んだ意匠の照明がつられている。大閲覧室は「これぞ図書館」といった雰囲気である。館内はいくつものセクションに分けられており、講義室もあれば Inquiry Lab と呼ばれるグループ向けのcommonsもあり、もちろんコンピューターラボもある。前項でも触れたが、ここでは幸運にも図書施設の責任者の方と少し話す機会に恵まれた。曰く、UCLA における図書館の目下の課題は、

1. 膨大な人数の学生(およそ4万5千人)に対して手狭な施設で、いかに学生が利用しやすい学習スペースを確保するか
2. 授業を行う教職員の要望(授業実施場所・時間・設備)に対してどう融通をつけるのか

ということである。とりわけ古い建物であるこの図書館を現在のニーズに合わせていくのは骨の折れる仕事であるが、それをやりとげないといけない。課題1に対して取り組んでいることは、開架式書架の占める面積を減らし、学習スペースを増やすということである。課題2については大教室を必要とする講義はオンラインで済ませ、実際に学生・教員が顔を合わせる際にはその講義のテーマに沿った、さらに踏み込んだ討論や実験、または課題の考察を行う「反転式授業」への転換を図っている。いずれも一筋縄ではいかないがこの10年取り組んでいるのはそういうことだ。



次に見学した施設は Biomedical Library という名の施設である。ロナルド・レーガン・メディカルセンター内の建物の内部にある図書館フロアで、大学の図書館としては比較的狭い床面積の施設が多層階で展開される。図書館の入り口があるフロアは、やはりラーニングcommonsスペースとなっていて、ソファ・ホワイトボード・グループ学習向けの机イス・デスクトップ PC エリアなどが配



置されている。当然館内は Wi-Fi 完備、AC 電源は各テーブルに備えられている。夏休みであったが、数十名の学生が黙々と勉強を進めていた。上層階は書庫スペース兼開架式書架となっており、こちらの施設でもやはり学習空間確保が優先され、伝統的な書架スペースや閲覧スペースは角に追いやられつつあることが見て取れた。上層階には学生の姿はなく、図書館スタッフのみが仕事をしていた。



北アリゾナ大学 (Northern Arizona University)

創立: 1899年

学生数: 約20000名

## 1 キャンパス

訪問3校目はアリゾナ州北部のフラッグスタッフという街にある州立大学であった。こちらは関西大学との交流が盛んにおこなわれている大学ということで、関西大学国際部を通して訪問の手筈を整えていただいた。その安心感もあり、この地に関する事前知識はゼロで現地入りしたが、さわやかな素晴らしい気候



と予期せぬ洗練された街の雰囲気はうれしい驚きであった。フェニックス空港から車で約2時間半程度北上したところに位置する都市で、標高2000mを超える高地にあるため夏でも過ごしやすい。近郊にはハンフリーズ山やネイティブアメリカンにまつわる国立公園等々あり、そこからさらに1時間半ほど北上すればグランドキャニオン国立公園や50分南下すればリゾート地として知られるセドナがある風光明媚な場所である。

キャンパスは街の数十ブロックを占める広大なもので、街と大学との境界はない。北側には3851mのアリゾナ州最高峰であるハンフリーズピークを臨み、濃い色の芝生と濃い赤茶色の石造り外観を持つ学舎が並んでいる。歴史の重みを感じさせる伝統的なものの中に、近代的な外観の最新鋭の設備を備えた建物が点在している。学舎と学舎をつなぐ直線には白いコンクリートの通路が緑の芝生を分割している。先の視察で見学したカリフォルニアの大学キャンパスとは異なった色調と雰囲気である。



キャンパス内には一般の観光客も宿泊できるホテルや、あか抜けた雰囲気のレストランもある。非常においしいハンバーガーを出すこちらのお店では、私の訪問当日、新年度に向けて大学各部署の責任者の方々がランチミーティングをされていた。その中に関西大学との架け橋となってくださった方もおられ、ご挨拶をいただいた。キャンパスを長時間にわたり案内していただいたクラーク先生はも

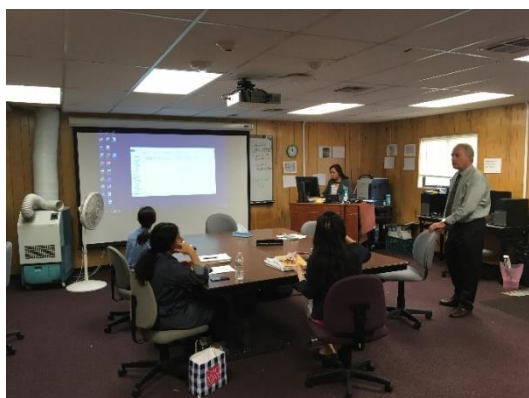
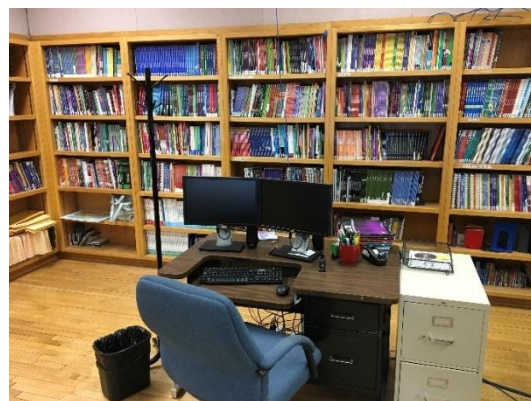
ちろんのこと、この時にご挨拶をいただいたアームストロング先生からも関西大学との関係をととても大切に考えていただいていることが伝わってきた。異国でのこうしたおもてなしは本当にありがたく感じられる。



## 2 図書館およびラーニングコモンズ

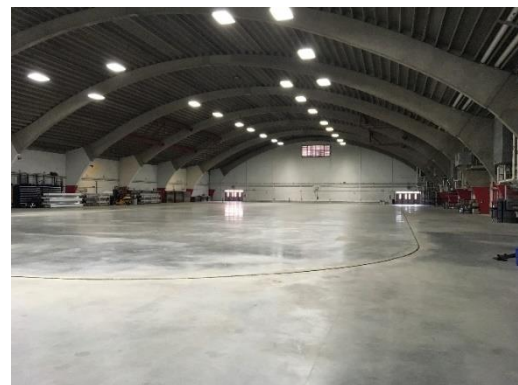
こちらの大学で最初に見せていただいた施設は Program in Intensive English が行われている学舎であった。主に海外から英語を学びに来る高校生に向けての集中レッスンが行われている場所である。この日も中国からの40名ほどのグループが英語のレッスンを受けていた。非常に真剣な雰囲気です。大学キャンパスのすぐ隣にあった小学校を改装し、丸ごと大学の施設の一つとして利用している。歴史が感じ取れる雰囲気の外観で、内部の各教室は外国語教育のために改装されている。講義式の授業向けの部屋・グループワークに適した部屋・PC とヘッドセットが備え付けられた部屋・授業に使える図書が並ぶ部屋・大人数での集会や式典、レクリエーションに使える体育館・機能的な職員室など外国語教育に必要なかつ十分な設備が一通り備わっている学舎になっている。

いずれの教室にも授業形態に応じた家具類・プロジェクターとホワイトボード・十分なスペースがある。今、日本で新学習指導要領の実施に合わせて考えられている教室像は、現在アメリカですでに展開されているものではないか。



次の見学は Student Union であった。いわゆる学生生協の食堂スペースで、様々な食べ物が手に入り、もちろんスターバックスもある。大学キャラクターのハンサムな Lumberjack (木こり) 像が玄関先に立っている築年数の浅い建物で、内部は非常に現代的な作りとなっており、一見簡素な雰囲気であるが、いたるところにいろいろな工夫がなされている。建物の3分の2は1階からの吹き抜けとなっているが、3分の1部分は2階スペースとなっており、そこには1階よりも長時間くつろげるソファ席が用意されている。又グループでディスカッションが行えるスペースもあり、グループで使用できるモニターやホワイトボードがおかれている。

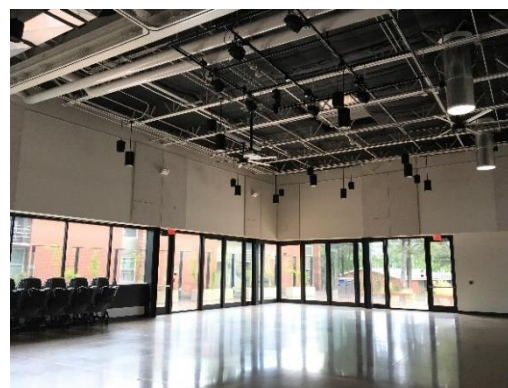
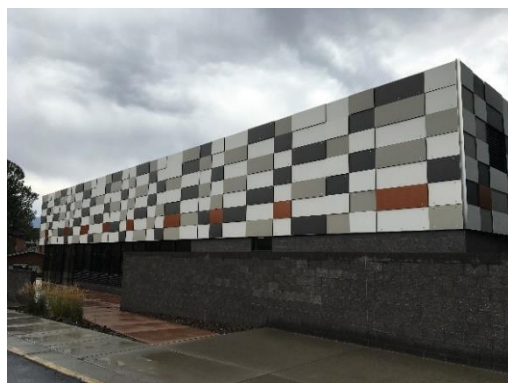
またこの建物にはフィールドハウスと呼ばれる屋内集会場も隣接している。フロアは可動式で、板張りにして多目的スペースとして様々なイベントで使うことができる施設である。



Cline Library は大学最大の図書館施設で、内部は比較的近年に改装されており最新の設備となっている。他大学の図書館と同様、玄関フロアは学生がグループや個人で、声を出しながらあるいはじっと黙って、パソコンや3D プリンターなどの機器を使用しながらあるいは鉛筆とノートと紙の本で自学自習できるスペースとなっている。音声作品が制作できるスタジオスペースもある。伝統的な図書館の雰囲気を持つ内装ではあるものの、グループ学習用スペースには5~6人掛けのテーブルとイス、そしてホワイトボードが設置されている。開架式書架は2階以上に設置されており、学生の使用頻度を考えたフロア設計がされている。また玄関を右に進むと集会ができるホールやカフェスペースも設けられている。



次に訪れたのは International Pavilion という建物。留学生の多くが生活している寮のそばに設置されている近代的な施設である。多様性を表すモザイクデザインが施された外観で、施設の建設から使用・維持において可能な限り環境負荷を低く抑える工夫がいたるところに施されている。LEED(環境負荷の少ない施設の基準機構)プラチナ認定を受けている。キャンパス内で初の Net Zero 施設(消費するエネルギー以上のものを創出する施設)で、屋根上のソーラーパネルは言うまでもなく、室内を照らす照明も自然光を利用したもので、必要に応じ照度が調節できる仕組みを備えている。床暖房やガラス面のブラインド調整機能を含む室内温度調整機能も環境負荷を最小限にするよう設計されている。排水の多くは再処理され再び施設で使用され、雨水は植栽への水として利用される。建設資材も近い土地で調達し、建設で出た廃材の多くは再利用されている。そのような建物の中は多目的に利用できる大きなホールといくつかのスペースに区切られている。日本人を含む世界各地からの学生がそこで様々なイベントを催し、出会い、学び合っている。





体育施設の充実ぶりもアメリカの大学の共通点である。こちらではスカイドームという名の屋内型スタジアムがあり、大学のスポーツチームの試合をはじめとするスポーツイベントはもちろん、有名ミュージシャンのコンサート会場としても使用されるという。またこの大学のプール施設にはロンドン五輪の日本代表選手が高地合宿に訪れている。夏休み中ということであいにく多くの施設は工事中であったが、大小さまざまな施設が設置されており、大学内外を問わず多くの人々が利用できるようになっていた。



ハワイ大学マノアキャンパス (University of Hawai‘i)

創立: 1907年

学生数: 約18000名

## 1 キャンパス

大学 HP から申し込み、当日受付を済ませて参加者全員が部屋に案内され、そこで大学概要の説明を受けることから始まる。学校の概要説明は大学職員の方メインで行われ、ツアーガイド役として現役大学生がその後を引き継ぐ形で進行的した。やはりここでも学生はよく話す。とにかく施設概要が話題の中心ではあるものの、普通の学生がどんな様子でいるのかなど、そこでの学生生活の詳細をイメージできるよう、たくさんの言葉で語り続けてくれた。またしてもガイドの学生は理工系学部 に在籍していた。

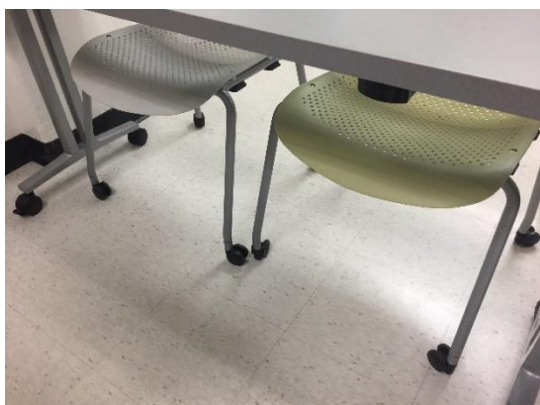
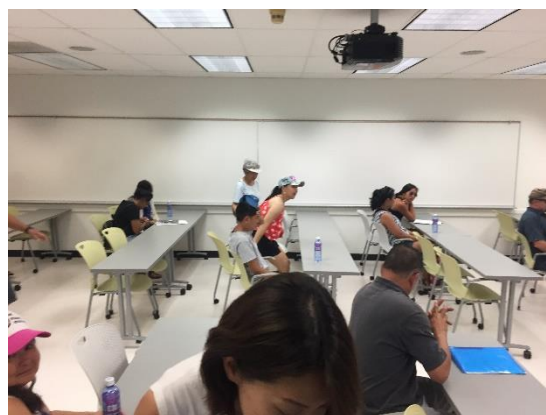


キャンパスは広大で、みどり豊かな南国情緒あふれる植栽が施されており、学舎はたっぷり隙間が取られて配置されていた。ワタナベホールやサカマキホールなどの日系人の名前がついた建物もあり親近感を覚える。夏休み期間ということで、キャンパスのいたるところで工事がおこなわれていた。学舎外観の統一感にはさほど注意が払われていない感じである。興味深かったのは、建築を学ぶ学生のアイデアが実際の建設に生かされている学舎があったことである。何のために何を学ぶのかということが非常にはっきりと認識されているということがうかがい知れた。日本という国での大学の位置づけ、そしてそこに通う学生の扱いの違いが感じられる。

広大なキャンパスの移動に多くの学生は無料バスを利用しているということであった。大学関係者だけでなく外部からの訪問者も無料で乗れる。専用アプリをスマートフォンにダウンロードすれば、次のバスがあと何分でやってくるのか簡単にわかるようになっていて、授業終わりに次の授業場所までの移動を段取りし、バスに飛び乗って授業に間に合わせるといった使い方ができるようであった。IoT の浸透が進む日常である。

## 2 図書館およびラーニングコモンズ

最初に案内してもらったのは Webster Hall 内の一般教室であった。80人規模の教室であるが側面、背面にも大型のホワイトボードが設置され、イスと机が可動式のものがおかれている。グループワークが想定されたデザインになっている。



次に Bilger Hall 内にある400人規模の大教室に案内してもらった。いわゆる階段教室で、私世代の人間がイメージする大学の教室にピッタリとはまるものであった。そのイメージと少し異なる点を挙げると、教壇背面が2段黒板ではなくホワイトボードである点、そしてその2段ホワイトボードと同等の大きさのプロジェクター用スクリーンがホワイトボードを挟んで両側に備え付けられている点である。もちろんそれぞれに投影できる巨大プロジェクターが天井からぶら下がっている。



続いて Sakamaki Hall である。2014年に改装されたこちらの学舎は「21世紀の教室」型の教室を備えている。学生は教室の入り口で靴を脱いで教室に入る。教室内はカーペット敷きで様々な色と形のイス、ソファ、デスク、カウンター、テーブルなどを備えている。そのほとんどが簡単にレイアウトを変えられるつくりのものである。壁には可動式のホワイトボードが幾枚もあり、その隙間からは外の植栽がガラス越し



に見える。もちろん、コンピューターなどの画像を映す最新の大きなモニターも設置されている。学生たちは思い思いの場所に座り、あるいは立ったままカウンターの上にノートやPCを置いて授業に臨む。グループワークの際に歩き回れるスペースが十分に確保されている。従来の教員アクティブ—学生パッシブ型授業とは一線を画す授業のためにデザ

インされた教室である。ガイドの学生もここでの授業が大好きだと語ってくれた。リラックスしたカフェのようなスペースで行われる非常に知的で興味深い内容の授業。筆者が通りかかった際も実際の授業が行われていた。学生たちは車座に座り、一人ずつなにやら発表している様子であった。発表を聞いている側のリアクションもよく、即座に意見や質問がやり取りされているように見受けられた。この雰囲気こそまさに21世紀の教室が意図するものなのであろう。

その次は Campus Center である。大学のブックストアやスターボックスなどがある。スターボックスは長蛇の列になることが多く、ここでも専用アプリからテイクアウトの予約などが入れられるとのことであった。地元産の野菜や果物を売る市場も開かれていた。

Warrior Recreation Center は学生が自由に使用できる巨大なフィットネスセンターで、ランニングマシンに始まりエアロバイク、エアロクライミングなど120種を超える各種マシンや、ロッククライミング、各種ウエイトトレーニング機器、バスケットボールコート2面がバレーボールコート3面にチェンジできる体育館などを備えている。もちろん男女のシャワールームとロッカールームを完備しており、空き時間があれば気軽に利用できるようになっている。施設そのものも新しく、壁には全面ガラス張りの面が広くとられており非常に開放的で清潔感のある施設となっていた。



キャンパスツアーの最後は Hawai'i Hall という名の建物のある、キャンパスで最も歴史的な一角への案内だった。広く青々とした芝生の中庭を中心にして、6つの古い学舎が向かい合うように建っている重厚な雰囲気のエリアであった。



ツアーの終了後、ガイドをしてくれた学生に私の大学訪問の趣旨を告げ、見どころを尋ねたところ勧めてくれたのが Sinclair Library であった。教えられた道筋をたどっていってみると、すぐに見つけることができた。玄関のある地上階はやはり例にもれず全面が学習エリアとなっており、書架はない。広い面積のフロアは様々な学習スタイルに向けたスペースとなっており、グループ向けのテーブルとイス、そしてホワイトボードが設置されたエリア、さらにそれがグループ単位のブースとなって、隣との仕切りがあるエリア、個別学習用の小さなブースエリア、開放的なレイアウトの個人学習用のエリア、デスクトップコンピュータが備わっている個別エリアなど様々なスペースが設けられている。学生は自分の好みや目的に応じた机とイスを選び、学習や研究を進める。もちろん Wi-Fi 完備、各机には AC 電源がある。2階から上は開架式書架があるが、閲覧用や学習用のスペースも広くとられている。視聴覚教材コーナーは最上階にあり、モニターとヘッドセットが備わった閲覧コーナーがある。建物の屋根にはソーラーパネルが設置されており、やはり持続可能性への取り組みが積極的におこなわれていることが見て取れた。





## あとがき～アメリカで今起っていること

視察をさせていただいた4つの大学はいずれも広大な面積のキャンパスを持ち、キャンパス内には数多くの学生寮があるため、食事・買い物ができる施設のほか様々な娯楽も充実しており、学生はキャンパスから一歩も外へ出なくても生活ができるようになっている。これは海外では昔からの伝統的な大学のありようである。しかしこれほど広い敷地を持つ大学でさえ学生の学習の場として使用できる場所の確保に苦心していた。例を挙げるならば、変化する授業形態に対応すべくこれまで大教室で行われていた講義は次々とキャンパス外、つまりネット上に引っ越しをし、キャンパス内ではより小規模な教室が多く作られ、そこでは講義内容をより深く掘り下げるゼミが多く行われている。教室以外の施設はというと、以前ではより専門的な知識へのアクセスの場であった図書館も、その機能の多くがネット上に確保された現状に合わせ、学生の多様な学習スタイルに対応できる機能を持つ施設へと変化していた。私が視察したすべての大学では、もっともアクセスが良いフロア、つまり玄関のある地上階がことごとくラーニングコモンズとして使用されていた。そこにはほとんど書架がなく、中には1冊の本さえも見当たらないものがあった。その代わりにあるのは色とりどりのソファや腰高のイスとグループで囲める机、ホワイトボードやモニター、AC 電源、そして Wi-Fi。その雰囲気は図書館というよりスターバックスの店舗のようなレイアウトと設備である。実際ほとんどの場合、同じフロアにカフェスペースも設けられており、コーヒーなどの飲み物やスナックが手に入る。また、グループ学習エリアでは当然会話が許可、というよりむしろ奨励されている。それに加えて個別に学習できるスペースも確保されている。学生はそこに自前の PC やタブレットを持ち込み、研究・学習を進めている。商業施設などであれば、「儲け」の確保・向上のため顧客のニーズや社会の変化に合わせて変化するスピードが速い。しかし文化教育施設では「伝統」、あるいは設置者やスタッフの「理想」などが使用者のニーズに優先されることが多く、変化のスピードが遅い。そんな施設の一つである大学でさえ、ユーザー・顧客である学生が目線に寄り添った施設のリニューアルがここまで進んでいる。裏を返せば、それだけ厳しい競争にさらされているということか。

現在の IT 環境を前提とした変化はもちろん街中で起っている。まずは一般的な例から。空港-ホテル間の送迎車の手配も web 上で日本にいながら簡単にできる。支払いに関しては、すべて登録しているクレジットカードからとなり、料金はもちろんチップの金額まで明確に表示されており、現場での現金のやり取りは一切不要である。また利用前日に送られてくる予約確認メールでは配車の時間や乗り場の位置まで正確に示される。現場では空港にいる配車係員がタブレット一つで配車状況を把握しており、こちらの苗字を名乗ればすぐに配車詳細に関して教えてくれる。説明通りにやってくる車に乗れば、ドライバーもタブレット端末でこちらの予約内容の確認から会社との連絡、そして地図や渋滞情報を参考に運転をする。非常に明快で安心感があるサービスが提供されている。



IT 環境をさらに進めた IoT 環境を活用し、新しい移動サービスを提供しているのが Uber。これは新卒のタクシーサービス会社である。アプリを手持の端末にダウンロードすれば、移動の必要が生じた際、そのアプリを開くだけで自分の周辺のどこに Uber の車が走っているかがリアルタイムでグーグルマップ上に表示される。目的地を入力すれば即座に料金と最寄りの車を運転するドライバーのプロフィールが顔写真入りで確認でき、配車希望をタップすれば即座にドライバーに連絡が行く。あと何分で自分の現在地にその車が到着か確認しながら待つことができる。目の前に表示された車とドライバーが現れれば、それに乗り込み目的地まで運んでもらえる。もちろん目的地までの道順も事前にマップ上に示された通りである。料金は事前に登録したカード上で決済されるため一切の現金のやり取りの必要はない。またチップは後で送られてくるメール上で金額を決めることができる。Uber ドライバーとして登録には実際に会社へ出向いて行っていくつかの審査を受ける必要があるものの、一般的なタクシー会社よりもはるかに簡単な登録手続きで済み、儲けも良いそうである。会社側にとっても、配車手続きが全てネットを介した個人の情報端末上で行われるために、大規模な配車施設が不要となる。また車は全て登録ドライバー持ちとなるため会社が負担する事業維持費も大幅に抑えることができる。これまでのタクシー会社が持つ問題点を全て解決してしまったかのようなこのシステムは全世界に拡大中であるが、既存のタクシー会社からの猛烈な反発があることは容易に想像できる。これ以外にも Uber 普及に伴うさまざまな課題はあり、当分の間は行政も厳しい規制をかけ続けられると思われる。しかしユーザー目線言えば、本当に素晴らしいサービスである。帰国した際、大阪伊丹空港から自宅への移動で Uber が使えればと思い、試しにアプリをタップしてみると一台の車も地図上には表示されず、心底がっかりした。

さらに新しいビジネスは生まれている。Bird という名の電動キックスクーターのシェアシステムである。ロスアンゼルスに滞在中、若者を中心に多くの人々が黒いキックスクーターに乗って市街地を移動している姿を目にした。はじめはただのレンタルサービスかと思っていたが、注意してみると街のあちらこちらで見かける。そして人の集まる施設のそばの駐輪場や、カフェなどの前のちょっとしたスペースに何台もそのスクーターが転がっているのを見て不思議に思い調べてみると、Uber とよく似たシステムで運用されている短距離移動用の電動キックスクーターであるということが分かった。まず端末にアプリをダウンロード。そうすると地図上に現在地の周辺で利用可能なスクーターが表示される。バッテリー残量も表示されるので現場に行ってもやっぱり使えないということもない。スクーターの元へいくとハンドル部分にある QR コードをカメラで読み取りロックを解除すれば、あとは自分の目的地へ向かう。用が済むとどこか邪魔にならない場所へスクーターを止め、アプリ上で end をタップすればそれでおしまいである。料金は1ドルから利用でき、やはりアプリ上に登録したクレジットカードなどから自動的に支払われる。自分が使用した bird を、今度はその周辺にいる別の誰かがまた同じ手順で使用する。充電の必要のある bird は”Bird Charger”登録をした人が路上から自宅へ持ち帰り、AC 電源からチャージして再

び路上に返すと謝礼が支払われるシステムが構築されている。それだけですべての bird の充電がまかなわれているのかどうか、また故障スクーターのメンテナンス作業などどうしているのかは不明なままの帰国となったが、会社側はすべてのスクーターの位置情報と車両の状態をネット上で管理できているので、充電以外の業務も不特定多数の人々に委託可能であることが想像される。それでも放置 bird 問題などで行政当局から告発されているニュースなど目にしたが、同じ人数の人が自動車やバイクで移動するよりもはるかに環境的な負荷は少なく、さらには自転車と比べてもより小さなスペースで駐輪できる。この移動手段を前提に整備された街ならば、電車やバス等の大掛かりな装置も不要となるのではないか。

このように今、アメリカではインターネット環境を前提とした新しい形態のシステムがあらゆるところに拡大している。Wi-Fiをはじめとするインターネット環境が、電気・ガス・水道と同様のインフラの一つになっているということである。3年前の一高海外英語研修引率の際に驚いたことであるが、ホテルやショッピングセンター内のみならず、個人経営の小さなお店からキャンプ場に至るまで、不特定多数の人が出入りする場所には必ずだれもが利用できる無料のWi-Fiが備わっており、教育施設もその例外ではない。学校キャンパスにおいて館内はもちろん、屋外においてもWi-Fiの電波がとんでいるエリアが多くある。最近少しずつ日本もその状況に向かってはいるが、アメリカでは何年も前にそれが当たり前になっている。それによってこれまで大勢の人と大掛かりな設備が必要だった多くのことが、ネット上で行えるようになってきているのである。そしてこの環境を前提にした学校運営が進められている。前段で述べた教育施設のスペースの再設計もこの環境を前提として推し進められている。ネット上で行えることはそちらでやってしまい、キャンパス内で浮いたスペースを作り出す。そこに生まれた新たなスペースを新たな需要に対応するスペースとして設計しなおし活用する。このようなことがアメリカでは10年以上前から、かなりの速度で推し進められているということである。情報セキュリティの問題や災害時の対策など様々なことを考える必要があることは間違いないが、それはガス・水道・電気においても同じことではあるまいか。稚拙な例であるが、多くの中・一高生が日々の学校生活のなかで解決したいと感じている問題の一つに、「通学カバンが重い」ということがあげられている。体調がすぐれない生徒のカバンなど持たれた経験のある先生方はお分かりであると思う。特にまだ体も小さい中学生が、遠方から満員電車で通学するには不適切な重さであるとさえいえる。このような問題もタブレット端末とインターネット環境を前提に学校設計をすれば存在しなくなる。また、生徒の出席を含む安否確認や各授業での課題の提出、プリントの配布、さらには家庭通知の配布など多くのことがもっとスムーズにできる。利便性だけでなく教育的効果という観点で考えたときにどうかということは検証の必要はある。しかし電車や飛行機・自動車、電話やテレビをはじめとする文明の利器も、さらには物々交換の代わりに貨幣を用いるというシステムでさえ様々な問題を克服しながら、あるいは抱えたまま現代社会に定着している。アメリカでは日本よりもはるかに積極

的に IT 技術の社会導入が行われており、おそらくはそれに伴う多くの問題も発生していることであろう。しかし同時により良い活用のアイデアも次々と生まれているのである。これはつまり、いち早くより良い活用法を獲得するには実際に使ってみる以外方法がないということの意味している。

今回の研修では目を奪われるような素晴らしい景色の国立公園などにも立ち寄った。そこでは視線を上げれば素晴らしい景色が見えるが、足元は一步踏み外せば即がけ下に転落である。ある時夜明け前に、日の出を見るために周囲が一望できる岩山に上った。岩山の上ではヨガをしながら夜明けを待つカップルや、写真やビデオ撮影が目的でカメラを構える人もいた。夜明けが近づいてくるほどに登ってくる人の数は増えるのだが、その中に3-4歳の双子を連れた若い日本人夫婦の姿があった。双子は男の子で、「止まりなさい」の声でその場に立ち止まることもできない様子である。柵も何もない岩山の上を喜んで走り回る双子の姿に一瞬空気が凍り付いた。見かねた初老の婦人が“Be careful!”の声をかけても、子どもたちにはもちろんのこと若い両親にもそれは届かず、写真撮影に興じていた。小さな子どもが簡単にアクセスできるような場所であるならば安全ということを一に考え、そこに目障りな柵を取り付けて素晴らしい風景を台無しにするかあるいは立ち入り禁止としてその風景を閉ざしてしまうのがおそらく日本的な発想なのであろう。けれど世界にはそれとは異なる方法で人々が素晴らしい風景を分かち合っている国が数多く存在している。「美しい景色を自分のものにしたい、しかし安全は誰かに確保してほしい」という考えでは、結局何一つ望むものを手に入れることはできないのかもしれない。

“Enjoy at your own risk”—伴う危険も含め、自分の責任において楽しんでください息をのむ素晴らしい景色はいつも、こう書かれた看板の向こうに側に広がっていた。



## 謝辞

今回の視察研修を行うにあたり、多くの方々に多大なご協力・ご尽力いただきました。  
末筆ながら以下にお名前を掲載させていただき、心から感謝申し上げます。

Mr. Gordon E. Clark (Northern Arizona University) and Ms. Lisa Clark

Ms. Melissa J. Armstrong (Northern Arizona University)

Mr. Robert B. Freel (UCLA)

有田謙志 様(JTB 教育旅行)

金井一陽 様(関西大学国際部)

青木英子 様(一中一高事務室)

## 参照 HP・文献

Stanford University <https://www.stanford.edu/> ならびに大学リーフレット

d school Stanford <https://dschool.stanford.edu/>

UCLA <http://www.ucla.edu/> ならびに大学リーフレット

Northern Arizona University <https://nau.edu/> ならびに大学リーフレット

University of Hawai'i <https://manoa.hawaii.edu/> ならびに大学リーフレット

21<sup>st</sup> century classroom <https://www.youtube.com/watch?v=R2U83SgssOY>

ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

アメリカ留学のための大学情報サイト <https://www.ryugaku.ne.jp/>

海外留学推進協会 <https://www.ryugaku.or.jp/>